

問答連 瓦版

その二六

第五期 哲学カフェ

3回 七月二十七日 二時から

人はどうして言葉を話すように

なったのだろうか？

人間にとって言葉の持つ意味とは何か？

発題者 大江矩夫さん

私たちは日常生活の中で、何気なく言葉を使って会話や考え事をしていきます。自分の話す言葉や言葉を使って物事を考えることについて、特に気にしたり疑問に思ったりはほとんどありません。でも、人の話が聞き取れなかったり、誰かが自分の噂(ウワサ)をしたり、幼児が意味不明の発話をしたりしたとき、一体何を言っているのかその意味を知りたくなるでしょう。その疑問を聞きたいと思ったり、話してみたくなることがあるでしょう。また、私たちは、なぜ、何のためにこの世に生きているのかについて疑問に思うこともあるでしょう。

他の高等動物は、動物として多くの点で人間と同じような生きるための困難(食糧や安全の確保、良き伴侶の獲得等)に直面し、考えたり情報交換をします。

しかし、言葉を持たないために、論理(文法)的に表現・伝達したり記憶することはできません。だから自然への疑問や生きていることの意味を問うことも思い悩むこともありません。

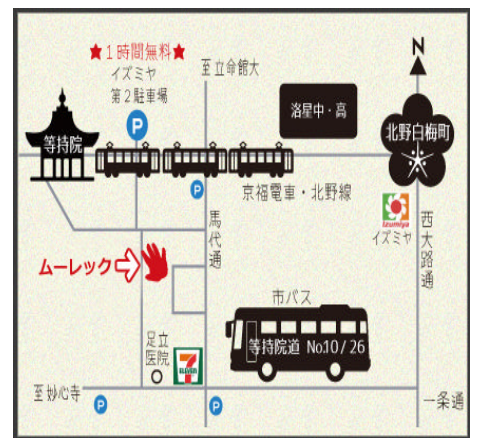
人間の乳児も一年間ぐらい言葉を話せません。人間の乳児は他の哺乳類に比べて生理的早産と言われ、養育者に依存する期間が長いですが、ハイハイができるようになると、好奇心(探索・疑問「何?」)を発揮して動き回り、又養育者の行動を進んで模倣します。乳幼児が言葉を話せるようになるのは、一歳前後から二足歩行が可能になり、「ママ」「マンマ」等の単語(一語文)が発音できるようになり、一歳半になると幼児語としての二語文(「ママ来て」)が話せるようになります。一語文、二語文の意義を考えると化石人類との比較が分かるようになります。

さて人類はなぜ、どのようにして言葉を話すようになったのでしょうか。言葉の起源の謎を解明すると、哲学上の難問の多くが氷解していきます。人間にとって言葉とは何か? 言葉の働きとは? 知識とは? 心とは?

言葉はどのように自分や他人を操り、動かし、騙し、諦めさせるのか?



1歳半、リンゴを指さして「リンゴ」と発声し、同意を求めて満足する。



JR京都駅から 市バス(26)『等持院道』
市バス(205)『北野白梅町』
京阪三条駅から 市バス(10)『等持院道』
市バス(16)『北野白梅町』

会場案内

第二回 まとめ

人間には、

人間を超えるものが必要?

必要でない?

【発題者 永井良和さん】から

今回は、人間には、人間を超えたものが必要か? というテーマをめぐる、ずいぶん深い議論ができたように思います。考えるヒントをいろいろな方からいただきました。たとえば、鮎川信夫が、戦後に、私たちは、私たちの「人間性の過剰」の故に、かろうじて戦時中の思想に抗うことができたのだ、と語ったというお話は、ヒューマニズム(人間中心主義)というものの意味を、もう一度、考え直させました。「ヒューマニズム」という言葉が、一見、美しい、やさしげなイメージを伴ってつけとられてしまうのは、とんでも



ない誤解なのでしょう。人間性とは、エゴイステイクであったり、残酷であったり、猥雑であったり、攻撃的であったり、過剰であるほかないものです。それでも、あえて、そのような人間性というものを中心において、そのような人間性を、簡単に人間を超えたもの（神やイデオロギーやナシヨナリズムなど）に譲り渡してはならないと考えるのが、ユマニズム（人間中心主義）の神髄なのです。だとすれば、今の社会の混乱の原因は、本当の「人間中心主義」を、過剰なまでにつきつめて考えることを怠っている私たちの弱さにこそ、求められるべきなのかもしれません。

また別の方が語られた、「人間には人間の問題を、自力で解決することはできない」しかし、また「つかんだもの」を「にぎりしめてはいけない」という浄土真宗の教えにも、同じようなすこみを感じました。「つかんだもの」を「にぎりしめたままである」「ような信心を、否定する信仰とは、どのようなものなのでしょう」。

宗教家の方が、私は、いつも、どのように生きたら、神様が喜ばれるのか、いつも迷いながら、神様と対話しながら、考えている、それが私にとっての信仰である、と語られたことにも、強い印象を受けました。ここには、大切なヒントがあると思いました。また、いろいろなひとたちの間での対話の場を、作るうとされている人が、一人一人の人にとって、本当に切実なこと、その意味での「リアル」（傷であったり、痛みであったり）を語り合うことでこそ、はじめて、本当の対話が成立するのではないかと話されたことにも、とても共感しました。

今回、私は、人間にとって本当に切実なリアルなこ

とについて、いろいろな立場の人の間で、対話が成立することを願って、このテーマを選びましたが、少なくとも、私にとっては、とても豊かな対話が成立した、えがたい時間となりました。

【参加者のみなさんから】

宗教家の方のお話として、（布教とは）神の願いを人に伝えたい（教誨師として）刑務所にはいつている人にいかに善悪の心を説くか（日々の行いは）どうすれば神様に喜んでもらえるかの三点が印象的でした。

UFOは実在する。宇宙人は人間（地球人）よりも理性的で行動な文明を持っているから、飢餓も戦争も憎しみなど人間の「罪」に当たるものはない。しかし、その宇宙人の中でもやはり「罪深い」ものは存在する。その罪深き宇宙人が牢獄たる地球に送られているのだ。というお話しを聞きまし。一瞬唐突な話だと思いましたが、宇宙を彼岸とし宇宙人を神とみなすとすれば、納得できる説明かなと思いました。人知を超える「存在」の不可思議さとその不確かさそのものが人間の弱さでもあり、愛おしさでもあるのかなと思いました。ふと思いついたことがある。（ひとつが）神（仏）を否定する心。（もうひとつが）「罪」は払っても払っても沸いて出て来る。だからこそ払うのだと私の父は教えた。（それは）「罪がお祓いで簡単に消えるはせん」という私の質問への答えである。

（A）「タコつぼ型のネット社会での横断的な対話の不成立」という点は、まさに現代社会の抱

える大きな問題だと思いました。で、どうすれば対話が可能になるのか？（B）「リアル」とは何か？主観的思い込みや幻想ではありえない動かしがたさ。手ごわさの実感。やはり誰もが「切実に」「身体で」感じているもの。（C）貧困、働き方、病気、人間関係、差別、性などをテーマに設けての哲学カフェの場合は、やはり誰もが一言実感とともに語れて意見が一致しなくても心が通い合っているという実感がある語りになることが多いようです。（D）私自身は抽象的なテーマより具体的、切実性のあるテーマで（私の主催する）哲学カフェをやりたいと思います。

世話人の周到なレジメと参加者の興味深いお話で知的好奇心がゆさぶられるステキな時間をすごせました。自分を超越する何かを探したとき、お話の中の（こころ）を癒すと話されたとき、私の中では【こころなんて内臓さ、内臓が痛むように痛むのさ】と詩（吉原幸子）の一行が立ちあがり、臓器・身体までも包み癒すなにかが必要では……. と思ったのですが、時間を置くと、それが「ことば」であり、詩や経典なんだろうと思えてきました。

また、家族内で異宗教をかかえ疎通のない痛みを述べておられた方のときは【ひたすらに異神を置いてゆくとときにあとふりかえれわがおもつひと】（吉本隆明）と歌がでてきました。

そして熟考すれば、私を超える何かは、先人の詩や言葉でありました。言（こんべん）に寺（てら）、それが、私の宗教的なものなんだと知らされました。いろいろ発見があり、これからも楽しみます。